

VEO を活用したオンライン教員研修プログラム開発のための基礎研究
Developing an Online Program for Continuing Professional Development with VEO

吉田達弘, Paul Miller, Christopher Sheen, 岸本周子
伊藤 寧, 近藤暁子, 鳴海智之

Tatsuhiko YOSHIDA, Paul MILLER, Christopher SHEEN, Chikako KISHIMOTO
Yasushi ITO, Akiko KONDO, Tomoyuki NARUMI

キーワード Video Enhanced Observation, タギング, 授業研究, 教師の専門性の発達, 教育実習
Key Words Video Enhanced Observation, tagging, lesson study, professional development, teaching practicum

本研究では、教員間で授業ビデオを共有し、授業改善を可能にするオンラインプラットフォーム Video Enhanced Observation(VEO)を活用したオンライン教員研修プログラムの開発、および、大学院の教育実習でのチームコンサルテーションに VEO を実装するための基礎研究を行った。VEO は、授業ビデオの中の重要な場面にタグを付与するタギング(tagging)の機能を持ち、そのタグをめぐって授業者は、授業に対する理解を深めたり、改善点を検討したりすることができる。

本研究には、VEO 開発者、国際的にデジタルコーチングを展開する教師教育の専門家、本学教員に加え、小学校で外国語・外国語活動の授業を担当する 2 名の教員が参加した。お二人の小学校教員は、自身の授業ビデオを VEO に投稿し、教員研修の専門家とオンライン上で授業改善を行う取り組みを 3 ヶ月間実施した。やり取りの分析や参加者からの聞き取りから、タギングされた場面をめぐって、専門家が指導助言し、授業者がそれに応答するやり取りが、その次の授業での改善に結びついていることが示唆された。本研究の成果を学校教育現場での教員研修に応用することで、近年の校内研修が抱える課題の解決につながる他、本学の教職大学院における「教科指導力向上実習」等に実装することで、効率的で対話的なチームコンサルテーションが実現できると考えられる。一方、課題としては、タギングに用いるタグセットを教員のニーズに合わせて開発すること、教師の専門性向上のためのコミュニケーションのあり方を検討することが挙げられた。

1 研究の背景

1.1 校内研修・授業研究をめぐる状況

わが国では、「授業研究」を中心とした校内で教師が自律的な研修を運営すること学校文化が根付いている(秋田・ルイス, 2008)。しかし、近年の教員の多忙化により、職能開発に割くことができる時間は、年々減少傾向にある。例えば、2018 年に実施された OECD の「国際教員指導環境調査」の結果をみると、日本の教師の 1 週間あたりの仕事時間は、調査に参加した 48 の国と地域(初等教育は 15 の国と地域)中、最も長い(小学校 54.4 時間、中学校 56 時間、参加国平均 38.3 時間)一方、教員研修を含めた「職能開発」(教員としての技能、知識、専門性その他の資質を高めるための活動)に割くことができる時間は、小学校 0.7 時間、中学校 0.6 時間と参加国平均の 2.0 時間を下回る。さらに、月に 1 回以上「専門性を高めるための勉強会に参加する」と回答した教員の割合は、中学校で 5.9%、小学校で 15.3%と参加国・地域の平均 21%よりも低くなっている。ただし、日本の小中学校の教員は、職能開発に対して高いニーズを持っており、調査対象となっているあらゆる項目(「担当教科等の分野の指導法に関する能力」「担当教科等の分野に関する知識と理解」「特別な支援を要する児童生徒への指導」「個に応じた学習手法」など)で他の参加国・地域の平均値を上回っている。

職能開発に割くことができる時間が減少しているのは、教師の多忙化が大きな理由であろうが、大野(2019)は、校内研修の一環としての授業研究そのものに消極的な教員も増えているとしている。その理由として、①授業研究は時間がかかる、②子どもたちが授業研究を通して成長している実感が持てない、③教員自身が授業研究を通して力量が向上した実感が持てない、④理論の構築などが先行し、わかりやすい授業研究になっていない、⑤公開授業のための授業研究になっている、⑥授業づくりの巧拙が指摘され、教員を勇気づけていない、⑦授業後の事後検討会の生産性が低い(pp.18-19)ということを挙げている。

上述した教員を取り巻く労働環境の悪化や教員が持っているニーズ、また、最近の授業研究が抱える課題から言えることは、授業研究を通じた校内研修は、教員の専門的な職能開発に重要であるが、何らかの方法で、校内

研修にかかる教員の労力を低くし、持続可能なやり方で、児童生徒の学習の向上に直接的に結びつくしくみを構築することが必要ということである。

1.2 大学院における実習とチームコンサルテーションの実施

上記で述べた教員研修や授業研究をめぐる課題は、学校教育現場だけの問題でなく、本学の教職大学院で実施される教育実習についても当てはまる。本学の教職大学院・教育高度化実践専攻では、2年間で10単位の实習（学校教育基盤実習・4単位、教科指導力向上実習・6単位）を連携協力校において実施する。これらの実習は、大学指導教員、実習校の管理職、メンター（実習校で学生の指導にあたる教員）が緊密に連携して進めることになっており、例えば、「教科指導力向上実習」の場合、大学指導教員は、定期的に実習先の機関を訪問し、メンターと協議しながら、大学院生を指導する「チームコンサルテーション」の実施が求められている。また、学生は週に一度、大学の指導教員と実習に関する省察を行う。チームコンサルテーションを軸とした教育実習の展開は、教職大学院の柱の一つであるが、一人の大学教員が数名の学生の修学指導を担当した場合、実習校の管理職やメンターと日程調整し、学校を定期的に訪問し、実効性のあるチームコンサルテーションの実施することは、それほど容易ではない。そして、昨年度、今年度と新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策として、大学教員が実習校を訪問することそのものが難しくなっている。このことから、筆者(吉田)は、オンラインを活用したチームコンサルテーションを実施した。しかし、現在のところ、オンラインでのチームコンサルテーションは、関係者が参加する「会議」にはなっているものの、学生の指導技術を向上させ、現場の問題解決を図るような「討議」の場になるには、実際の学生の実習場面をリモートで共有するなど、さらなる工夫が必要であると感じている。

1.3 Video Enhanced Observation(VEO)開発の経緯

本研究では、前節に掲げた課題を克服する方法として、VEOという授業改善、および、教師のパフォーマンスの改善を支援するオンラインプラットフォームを導入し、新しい授業研究、授業改善の方法について検討する。

VEOの開発の背景、概略は以下の通りである(詳細は、Haines & Miller, 2016; Battle & Miller, 2017を参照)。VEOは、英国のVEO Inc.が開発したオンラインシステムである。会社自体は、本研究組織の一員であるVEO Inc.最高経営責任者 Paul Miller氏が、協同設立者のJon Haines氏とともに、英国のニューキャッスル大学の資金援助を受け、2015年に設立した。VEO Inc.設立以前、Miller氏は、教育コンサルタントとしてガーナやシエラレオネなど西アフリカ地域の教員研修のコーディネートに携わっており、この地域の教育改善事業として、集合型の大規模な伝達研修（カスケード型と呼ばれる）の開発にあたった。しかし、この方法では、学校の授業を変革するほどの直接的効果がなかったため、改善策として、すぐれた授業事例を録画したビデオを用いて、学校や地域ごとに研修を実施した。モデル授業のやり方を試したり、自らの授業を振り返る方法によって、研修効果が出始めたが、この方法では、西アフリカという広大な地域に学校が点在する状況ではコストがかかり、広域での教育効果につなげるには至らなかった。

一方、Haines氏は、英国国内で教員研修にあたっていたが、管理職や研修トレーナーの観察・評価によるトップダウン的な教員研修のやり方に課題を感じ、同僚同士での授業研究や授業者本人が授業を振り返って課題に気付くといったやり方への転換を模索していた。その後、教育現場へのネットワークやICT機器の教育現場への導入が急速に進む中、両者が経験した現場での問題を解決するやり方としてVEOの最初の発想が生まれた。

1.4 VEOの基本的な機能

VEOは、授業実践の経過をビデオ録画し、パフォーマンスの改善を支援するオンラインプラットフォームである。授業を撮影し、コメントやマーキングする機能を持つアプリケーションはこれまでも存在した(例、刑部, 2019)が、管見によれば、ビデオをオンラインで共有し、参加者が相互にタギングやコメントすることができる機能を持つアプリケーションは、VEOの他見当たらない。以下、オンラインでの共有方法とタギングとについて概説する。

(1) オンラインでのビデオの共有¹⁾

プロジェクトに参加するユーザーは、Apple iPad にインストールされた VEO アプリで授業を撮影するか（図1の Record をクリック）、あるいは、あらかじめ iPad 付属のカメラアプリで撮影したビデオを VEO のポータルサイトに投稿する（図1の VEO Portal をクリック）。VEO アプリで撮影した場合は、後で述べるタギングを撮影しながらリアルタイムで行うこととなる。VEO ポータルは、ブラウザで表示され、投稿されたビデオは、ライブラリの中に保存される。保存されたビデオに対しては、事後にタギングをすることができる。ライブラリ内の任意のビデオは、プロジェクト内のメンバーと共有することが可能で、これによって、1 つの授業ビデオに対して相互にタギングしたり、コメントを共有したりすることが可能となる(図2)。



図1 VEO の iPad 用アプリ



図2 VEO を使ったビデオの共有とタギング、コメントの仕組み

(2) タギング

タギング(tagging)は、授業中の重要な場面に印を付け、後でその場面を呼び出すことができる機能である。タギングは、あらかじめいくつかのタグをまとめた「タグセット」の中から選択して使用する。図3では、「学習者の動機づけ(Motivation)」というカテゴリーに含まれる「信頼関係の構築 (Creating rapport)」というタグセットを示している（ビデオの右側に並ぶアイコン）。ビデオを再生しながら、アイコンをタップすると、タグが付与される。タギングを終了し、ポータルに送信すると、図4のようにタギングされた場面が時系列で表示される。付与されたタグをタップすると、場面が瞬時に表示される。タグセットの詳細については、後述する。

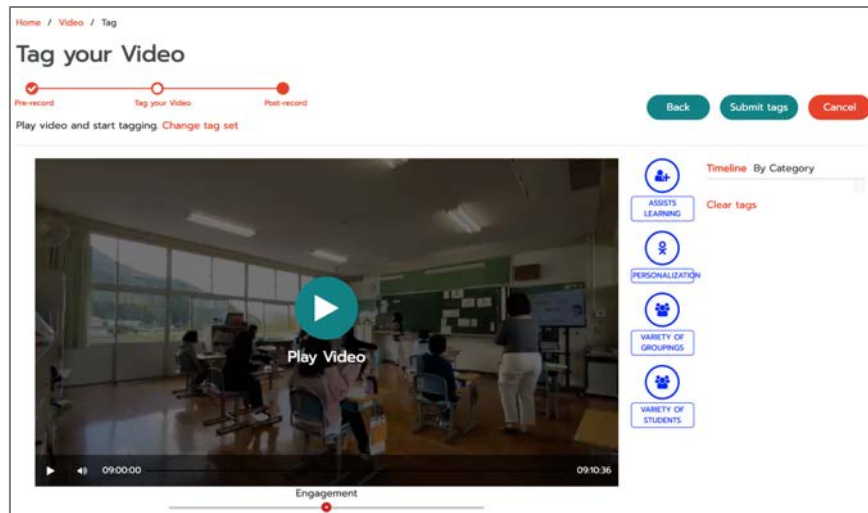


図3 VEOのタギング画面

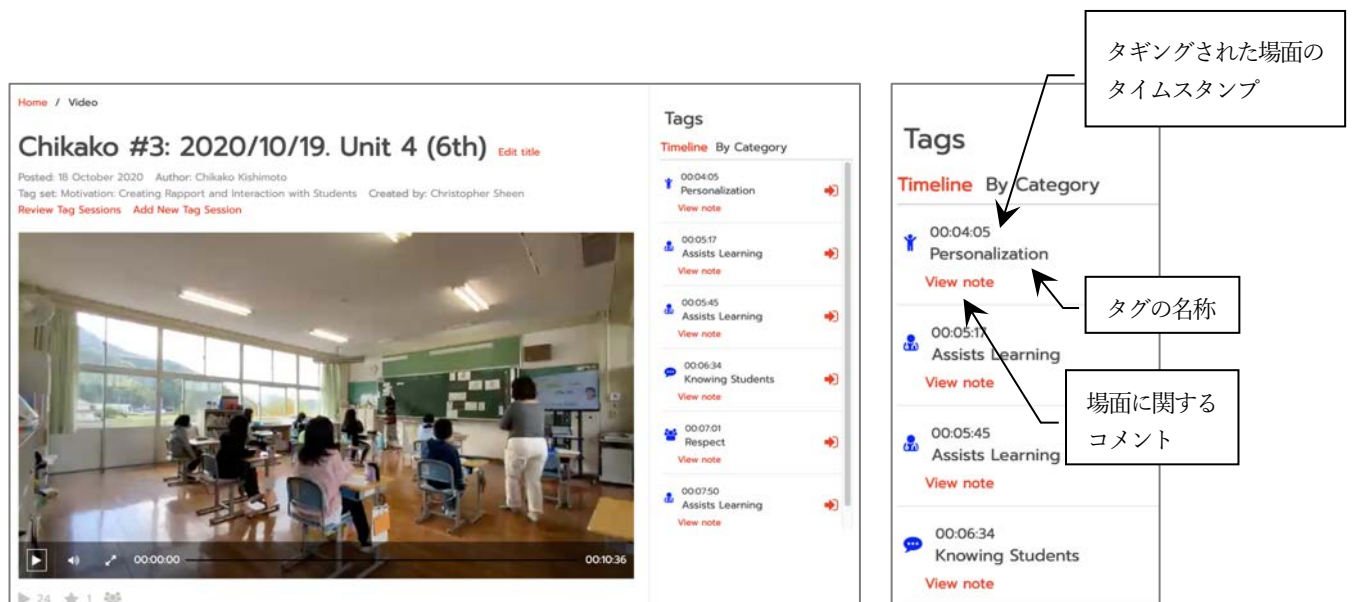


図4 時系列に並べられたタグ

2 研究の目的

ここまで述べたように、本研究は、学校教育現場での教員研修、および、大学での教育実習でのチームコンサルテーションをめぐる課題を解決する手段として、授業改善のためのオンラインプラットフォーム VEO を導入し、授業改善や教員の専門性の向上に資するかどうかを検討することを目的としている。特に、授業場面に付与されたタグをめぐって、助言者と教員がどのようなやり取りを行い、次の授業改善につなげたか、また、教員の多忙化が進む学校教育現場で教員研修や授業研究を推進するために、また、教職大学院での教育実習におけるチームコンサルテーションを円滑にかつ効果的に実施するために、VEO がどのように貢献するかを検討する。

3 研究の実施組織

本研究は以下のような組織で実施した。

- ・ 吉田達弘（兵庫教育大学）…研究代表者・研究の総括、学校教育現場への VEO の導入
- ・ Paul Miller（CEO, VEO Inc. UK）…本プロジェクトにあわせた VEO 環境の設定、コンサルテーション
- ・ Christopher Sheen（Oxford University Press Turkey）…VEO を使ったオンラインコーチング

- ・ 岸本周子（丹波篠山市立西紀小学校）…小学校の外国語科の授業での VEO の活用，授業改善
- ・ 伊藤 寧（三木市立緑が丘東小学校）…同上
- ・ 近藤暁子，鳴海智之（兵庫教育大学）…今後の VEO の活用に関する提案

Miller 氏は，すでに述べたように VEO の開発者であり，VEO Inc. の最高経営責任者である。自身もこれまでヨーロッパ，西アフリカ，北米など各地で VEO を使った実証研究や教育実践に携わってきた。研究代表者である吉田は，2017 年から VEO を使用しているが，日本でのアーリーアダプターであり，かねてより Miller 氏とやり取りを続けていたことから，本研究への参画をお願いし，VEO の設定や効果的な使用法についての助言をいただいた。Christopher Sheen 氏は，オックスフォード大学出版局トルコ支社で，教員研修や研修講座のコーディネーターをしており，現在，VEO を使ったデジタルコーチングを各国で展開している。Miller 氏からの紹介を受け，本研究へ参画いただき，実際に，お二人の小学校の教員のコーチングを行っていただいた。岸本周子教諭，伊藤寧教諭は，県内の公立小学校に勤務しているが，このお二人の学校で実際に VEO を導入し，Sheen 氏のコーチングの下，授業改善を行っていただいた。本学，近藤准教授，鳴海講師からは，今後の大学院での実習へ VEO の導入に際しての助言などをいただいた。

4 研究

4.1 研究対象

本研究の対象となったのは，丹波篠山市立西紀小学校で岸本教諭が担任を務める 6 年生の外国語科の授業と，三木市立緑が丘東小学校で伊藤教諭が担任を務める 6 年生の外国語科の授業であった。今回，外国語科の授業を対象としたのは，研究代表者である吉田の専門領域であり，研究協力を得やすいという理由があった。協力を依頼したお二人の先生方は，それぞれの学校や自治体で外国語の教員研修をリードする立場にあり，ご自身の授業の質を向上させたいという気持ちから，本研究へ参加を快諾して下さった。また，小学校の外国語教育については，これまでも各自治体で教員研修が重点的に行われてきており，授業改善に対する現場のニーズが強いため，今回の取り組みがなじみやすいと考えた。Sheen 氏にはお二人の先生方に対して VEO を活用したデジタルコーチングを実施していただいた²。

4.2 研究期間

本研究は 2020 年 5 月に採択されたが，4 月に出された緊急事態宣言により学校が一時休校になったため，実際の取り組みが予定よりも大幅に遅れた。8 月になって，丹波篠山市立西紀小学校と三木市立緑が丘東小学校，それぞれに研究協力の依頼を行い，学校長および岸本教諭，伊藤教諭より，参画の承諾を得た。9 月末から両校で VEO を導入した授業改善を開始し，12 月初旬まで継続した。この間，岸本教諭，伊藤教諭には，20 分程度の授業ビデオを 9 本撮影し，ポータルサイトにアップロードしていただき，Sheen 氏からコーチングを受けながら，授業改善に取り組んでもらった³。

4.3 研究方法

(1) デジタルコーチング

デジタルコーチングは，現在，オックスフォード大学出版局トルコ支社が，Sheen 氏を中心に，アフリカ，中南米，東南アジアで展開している言語教師研修のスタイルである。それまでの言語教師研修のプログラムでは，研修指導者が研修参加者の授業を訪問し，それに対して評価的観察を行い，フィードバックするというやり方であった。しかし，このやり方は，どうしてもワンショットの研修となり，継続性が弱いこと，また，研修参加者の行った授業に対して，指導者から評価的なフィードバックが与えられることが多く，授業者の評価に対する不安が強く，自律性が育たないことなど，課題が多かった。

Sheen 氏らは，こういった課題解決の方法として，VEO を活用したデジタルコーチングを開発した。Sheen 氏によると，それまでの教師トレーニングと異なり，デジタルコーチングでは，研修期間中に複数のセッションを行いながら継続的に取り組めること，また，ビデオを共有し，タギングしながら，具体的な場面に沿って教師の専門的力量を高めることができるというメリットがある。ただし，一定期間，継続的に研修に取り組むため，研修指導者と参加者との間には，良好な関係を構築することが求められる。実際，本研究で実施したデジタルコーチングでも，Sheen 氏は二名の小学校の教員に対して一方的な指導助言の提供とならないように，教師が自身の

授業の具体的な場面を振り返り、自律的に授業改善できるようプログラムを構成していた。

(2) タグセット

本研究では、オックスフォード大学出版局トルコ支社の許可を得て、Sheen 氏がデジタルコーチングで活用しているタグセットを使用した。それらのタグセットのカテゴリーは、以下の通りである（巻末資料参照）。それぞれのカテゴリーの中に、複数のタグセットが内包されており、実際には、この中からタグセットを一つ選び、タギングに使用する。

-
1. 授業マネジメント(Classroom Management)
 2. 指導法(Methodology)
 3. 教師の発話スキル(Presentation Skills)
 4. 学習者の動機づけ(Motivation)
 5. 指導計画と教材(Lesson Planning & Materials)
-

図4 本研究で使ったタグセットのカテゴリー

例えば、「1. 授業マネジメント」には、以下のようなタグセットが含まれている。

- ・ 準備時間 (Timing)
- ・ 黒板の使用 (Blackboard use)
- ・ グループ/ペアワークの編成 (Group/Pair work organisation)
- ・ 学習規律の維持 (Maintaining discipline)
- ・ 指示や理解度の確認 (Giving instructions and checking understanding)
- ・ 机間指導 (Monitoring)

これらのタグセットのカテゴリーは、ヨーロッパの言語教育機関を認証評価する団体の一つである Eaqals (Evaluation and Accreditation of Quality Language Services)が提供する枠組み(TD Framework, Eaqals, 2016) をベースに開発されている。TD Framework では、教師の専門的力量が5つの領域に整理され、それぞれで目指される教師の専門性が3つの発達段階で記述されている。オックスフォード大学出版局トルコ支社が開発したタグセットは、TD Framework に示される「授業における指導と支援」に関する項目を基盤としている。

(3) 授業ビデオ

お二人の小学校の先生方には、9月末からほぼ毎週1回のペースで、合計9本のビデオをポータルサイトに投稿していただいた。45分間の授業のうち、教師の指導や児童の言語活動が、特に活発であった場面を15～20分ほどにトリミングしたものが投稿された。短期間のうちに多くのビデオを投稿していただいたが、上で述べたデジタルコーチングの目的にあわせて、9本のうち、最初の5本については、Sheen氏が授業に関するコメントや改善点についてタギングし、コーチングを行い、授業者がそれに応答したり、次の授業での改善につなげるという流れであった。また、6、7回目は、授業者が、タグセットの中からタグを選び、授業場面にタギングし、Sheen氏が、その場面に関するコーチングを行った。さらに、8回目については、岸本教諭、伊藤教諭が、投稿された相手のビデオを視聴し、タギングをした。同僚同士でタギングし、協同的に授業改善に取り組む体験となった。第9回目に、もう一度、それぞれの教師が自らの授業にタギングを行い、Sheen氏によるコーチングを受けるというやり方であった(表1)。

回	内容
第1～5回	Sheen氏による授業場面へのタギング・コーチング→授業者のコメント、次時での改善
第6～7回	授業者自身によるタギング(self-tagging)→Sheen氏によるコメント・コーチング
第8回	授業者相互でのタギング(peer-tagging)→Sheen氏によるコメント・コーチング
第9回	授業者自身によるタギング→Sheen氏によるコメント・コーチング

表1 デジタルコーチングの流れ

今回の取り組みの中で生じた課題として、Sheen氏のデジタルコーチングが英語を用いたタギングとコメント

となったために、小学校での英語授業を担当するお二人の先生方には、思いのほか負担が増してしまったことが挙げられる。英語でテキストの読み取りと応答をお願いしたので、お二人の先生方の回答に時間がかかったり、Sheen 氏のコメントに対して、十分な応答ができなかったりした。そのような場合は、吉田が仲介役となり、やり取りを継続させた。先生方への聞き取りからは、タギングされた場面での Sheen 氏のコメントに対する応答を英語に翻訳し、投稿することは難しかったものの、付与されたタグをめぐる気づきがたくさんあり、上手く表現できないもどかしさを感じたということであった。この点については、第9回のビデオの投稿が終わった後、Sheen 氏の役割を吉田が引き継ぎ、お二人の先生方と日本語を介してやり取りを続けたが、お二人からは多くの応答があり、授業に対する洞察力が高まっていた。

5 結果

以下の図は、10月28日に実施された伊藤教諭の授業ビデオ（第5回）である。この授業では、過去の表現に関する学習が行われた。小学校での英語の授業では、新しく学ぶ表現形式が、場面の中で導入され、児童たちが表現の意味を理解した後に、何度か口慣らしをし、実際に、児童たちがその表現を使ってやり取りをする活動を行うことが多い。伊藤教諭の授業でもそのようなやり方を心がけていたが、児童が表現に慣れ親しむことに時間を割くことが多く、表現の反復練習になってしまう傾向にあった。そこで、Sheen 氏からは、改善策として、児童自身の気持ちを表現できる場面や、日常の場面を想定した中で表現の練習をすることが提案されていた。第5回のビデオの中では、Sheen 氏のコーチングに対して伊藤教諭が上手く答えている場面がみえる。図〇右側のタグリストにある「表現の個人化(Personalization)」というタグ（赤い点線で囲んだ部分）が付与された場面では、伊藤教諭が、4人のグループ活動を設定し、「まず、二人で、What did you do last weekend?とインタビューして下さい。その後、向きを変えて、インタビューをしてみよう」と子どもたちに指示を与え、お互いの経験を聞きあう活動をおこなっている。

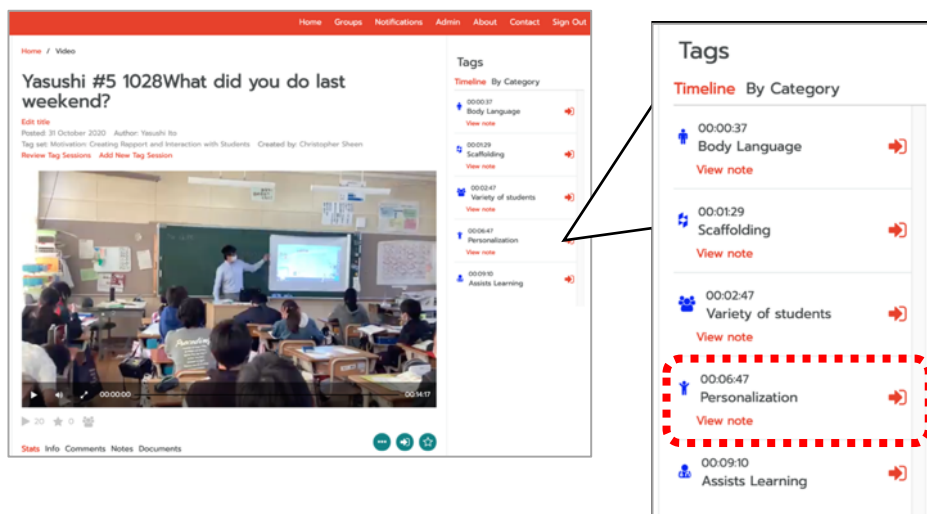


図6 伊藤教諭が VEO に投稿したビデオと Sheen 氏が付与したタグ

このタギングをめぐる Sheen 氏と伊藤教諭は、次のようなやり取りを行っている。Sheen 氏は、ビデオの6分47秒から始まる場面に、「表現の個人化(Personalization)」というタグを付与し、「児童たちが、(自分自身に関係するように) 自分のたちの文脈の中で、めあてとなる表現を繰り返すのは良いことです」(図7 2-3行目)と記し、直後に、「学びの支援(Assists Learning)」というタギングにも言及している(6行目)。ここでは、児童たちに練習をする時間を当てるのが効果的な一方、1) 活動を早く終えた児童が、参加し続けるにはどうしたらよいか、2) 早く終わった児童には、友達にもう一度質問してみて、その答えをメモしておくように指示してみる、3) 活動を早く終えた児童には、授業の終わりに、友達がどのように答えてくれたかを聞いてみる、などの質問や助言をしている(6-10行目)。これに対して、伊藤教諭は、「早く終わった児童への対応を工夫してみます」と短く回答している(13行目)。

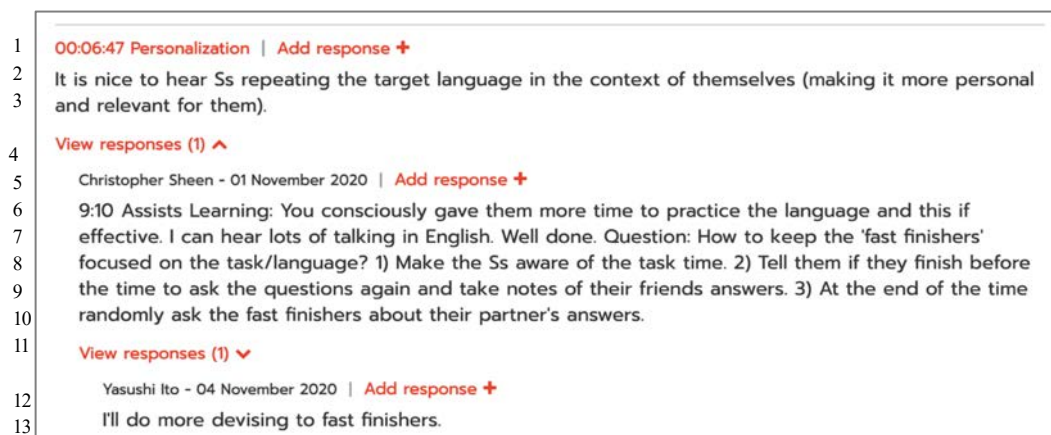


図7 第5回目のビデオをめぐる伊藤教諭と Sheen 氏のやり取り

このようなやり取りは、短期的には小さな変化であるが、コーチングを通して授業者が小さな気づきを積み上げていくことで、長期的には、大きな授業の変革に結びつく。Sheen 氏は、伊藤教諭の第7回目のビデオに対して、次のようなコメントを残している。

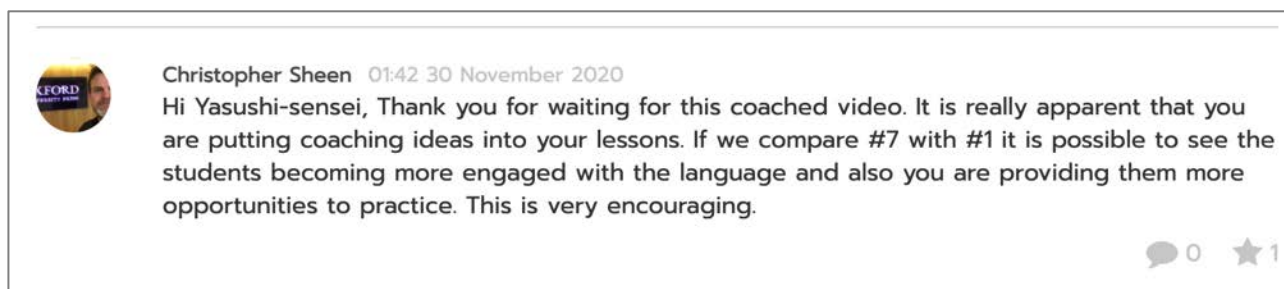


図8 第7回目のビデオに対する Sheen 氏のコメント

(抄訳)・・・私がコーチングの中で助言していることを、伊藤先生が徐々に授業に取り入れて下さっているのがほんとうによく分かります。今回(7回目)と初回の授業を比べてみると、児童たちがより言語を使って取り組もうとしていることがはっきりと分かりますし、伊藤先生も児童たちが練習する機会を増やしていますね。この事はとてもはげみになります。

Sheen 氏のコメントやコーチングで使用されている言葉に注目すると、授業者に対するポジティブな表現が多用されている。また、コーチング後に教師の行動が変化している点や、教師のコメントの中に見られる変化への気づきを称賛しているが、こういった言葉掛けは、授業をさらに改善していこうという教師の意欲につながる。冒頭で Sheen 氏が述べていたように、これまでの観察評価という教員研修のやり方と異なり、コーチングにおいては、研修指導者と授業者が、良好な関係を気づきながら、専門性の発達を継続していくことが求められるが、本研究においてもやり取りの分析から、Sheen 氏と二人の授業者との間に良好な関係が築かれていたことが読み取れた。この点は、教師教育に携わる大学教員が、学生や学校教育現場の教師とコミュニケーションを行うときに、心がけるべき重要な点である（この点については、6(2)で詳述する）。

6 課題

今後、VEO を活用した授業研究を学校教育現場での教員研修や、実習におけるチームコンサルテーションに実装していくために検討すべき課題として、(1) 教員のニーズに合わせたタグセットの開発、(2) 教師の専門性向上のためのコミュニケーションのあり方、の2点を挙げる。

(1) タグセットの開発

本研究では、オックスフォード大学出版局トルコ支社が自社のデジタルコーチングに使用するタグセットを活

用した。しかし、研究に参画して下さったお二人の先生方からは、これらのタグの中には、普段の授業研究では、あまり話題にしないタグも一部あり、とまどったという声が聞かれた。タグセットは、校種、教科、教職経験などに関わらず共通して設定できるものもあるが、授業研究を行うには、授業の文脈に合わせたタグセットを開発していく必要がある。また、お二人の先生方からは、今回使用されたタグの多くが、教師行動に対して付与されたので、授業中の児童生徒の活動や行動に注目したタグセットも検討する必要があるとの意見もいただいた。このように授業の文脈を重視することは大切だが、過剰に文脈にあわせすぎるとその数だけタグセットが生成され、学校や教師間での課題の共有や比較などがやりにくくなる。この点は、VEO導入の際にもっとも検討が必要な課題となる。さらに、タグセット作成後は、参加者間でタグセットやタグの意味について共通理解するセッションを行い、タグを解釈したり、使用する際にブレがでないようにする必要がある。

(2) 教師の専門性向上のためのコミュニケーションのあり方

Sheen氏が指摘していたように、これまでの教員研修や授業研究では、公開された授業に対して、外部の専門家や経験のある教師が評価的に指導することが多かった。しかし、授業者の気づきを促し、ひいては、専門性の向上および児童生徒の学習の改善に至るような授業研究を行うには、授業者や参加者の自律性を高めていく必要がある。VEOを活用するとやり取りの媒体は、対面コミュニケーションではなく、テキスト中心となるため、研究に参加する者同士で、どのようなコミュニケーションを交わしていけば、教師の専門性の発達に貢献できるのかについて、これまで以上に意識する必要がでてくる。このことは、教師教育に携わる大学教員やベテラン教師、指導主事など日頃から指導助言をしている立場の者には強く当てはまる(自戒の念を込めて)⁴。この点で、Sheen氏がコーチングの中で展開していた言語使用はとても参考になる⁵。

本研究は、コロナ禍の中実施し、学校教育現場での実践が、実質3ヶ月という短期間であったこと、また、小規模な取り組みであったことから、一般化して論じられるような十分なデータ収集や分析となっていない。しかし、VEO上のタグをめぐるSheen氏によるコーチングとお二人の先生のやり取り、また、岸本教諭、伊藤教諭からの聞き取りからは、VEOの活用によって、学校での校内研修や授業研究で生じている課題(1.1参照)の解決が可能であることが示唆された。例えば、大学教員と学校教育現場が協同的に授業研究を行う場合、学校のロケーションによっては、講師依頼をすることが容易ではないが、オンラインでの授業研究を行うことで、場所の問題がクリアされると同時に、タギングによって課題が焦点化されること(岸本教諭)、また、VEO上でビデオを共有することで、勤務終了後やすきま時間を使って振り返りや同僚とのやり取りを行うことが可能になり、「小さな研修」を継続することができること(伊藤教諭)が挙げられていた。また、他の教員のモデルとなるすぐれた授業を、授業者によるタグとともに共有すれば、授業者のねらいや児童生徒の学びが深まっている点などを焦点化しながら、授業研究が可能となるだろう。あわせて令和3年度の大学院での教育実習では、実習校の承諾が得られれば、VEOを活用したチームコンサルテーションを試験的に実施し、本格的に教育実習に実装し、研究を継続したい。

謝辞

新型コロナウイルス感染症対策で通常とは異なる学校運営の中で、本研究の実施を許諾して下さった丹波篠山市立西紀小学校、三木市立緑が丘東小学校の校長先生および教職員のみなさま、児童のみなさまに感謝申し上げます。また、研究推進チームの職員の皆様には、国際研究の実施にかかる諸手続きを進めるにあたり、サポートして下さったことにお礼申し上げます。

巻末注

¹ VEOを利用するには、教育機関あるいはプロジェクト(以下、プロジェクト)単位で、有料の管理者アカウントを取得し、プロジェクトに参画するユーザーには、その配下に個人アカウントが付与される。データ取扱いのセキュリティについては、世界基準および各国・地域の基準に照らし合わせて厳格に行われている(<https://veo.co.uk/data-security-and-safeguarding/>)。

² もちろん、VEOは、外国語以外の教科にも活用が可能で、学校教育以外にも、医学・看護などの専門的職業の領域でも活用されている(VEO Inc.のウェブサイト参照 <https://veo.co.uk/case-studies/>)。

-
- ³ なお、授業をビデオ撮影し、外部のポータルサイトに保存することから、両校の校長には、関係者のプライバシーの保護と情報セキュリティの遵守について説明し、文書での承諾を得た。
- ⁴ 同期的コミュニケーションになってしまうが、VEO と Zoom ミーティングなどのビデオ会議のシステムを組み合わせることも検討する価値がある。
- ⁵ 吉田は、そのような授業研究のあり方を、「二人称的アプローチ」という形で議論している（吉田, 2020; Yoshida, 2020）。

参考文献

- 秋田喜代美・ルイス・キャサリン. (2008). 『授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』 明石書店.
- Battle, J., & Miller, P. (2017). Video Enhanced Observation and teacher development: teachers' beliefs as technology users. *EDULEARN17 Proceedings, 1*, pp.2352–2361. <https://doi.org/10.21125/edulearn.2017.1487>
- Eaquals. (2016). *The Eaquals Framework for Language Teacher Training & Development*. Available from <https://www.eaquals.org/resources/the-eaquals-framework-for-language-teacher-training-and-development/>
- Haines, J., & Miller, P. (2016). Video-enhanced observation: Developing a flexible and effective tool. In O'Leary, M. (ed.) *Reclaiming Lesson Observation: Supporting Excellence in Teacher Learning* (pp. 127–140). Routledge.
- 刑部育子. (2019). 「リフレクションのためのビデオツール—CAVScene の開発を通して」 佐伯胖・刑部育子・荻宿俊文編著『ビデオによるリフレクション入門—実践の多義創発性を拓く—』 東京大学出版会.
- 文部科学省. (2020). TALIS (OECD 国際教員指導環境調査) . (https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/Others/1349189.htm)
- 大野睦仁.(2020)『授業』を中心に据えた校内研修の考え方とやり方『授業づくりネットワーク』No.34.学事出版.
- 吉田達弘.(2020). 「『二人称的アプローチ』による英語授業研究の試み」 浅川和也他編著『英語授業学の最前線』 ひつじ書房.
- Yoshida, T. (2020). A second-person approach toward understanding English language lessons: A sociocultural analysis of the post-lesson conversation. *The European Journal of Applied Linguistics and TEFL*.20 (2) (pp.45-64)

巻末資料 1

オックスフォード大学出版局トルコ支社によるタグセット (Reflection on Needs) の日本語訳 (吉田による)
(日本語訳及びその公開については、Sheen 氏、オックスフォード大学出版局トルコ支社より承諾を得た。)

事前指導～ニーズの振り返り

Individual Coaching Session (ICS)では、あなたが教師として特に興味を持っていることを選択してコーチします。以下のボックスの中から、あなたのコーチに特に焦点化してもらいたいものを2つ選んでください。それ以外の項目があれば、次のページに追加してください。

1. 授業マネジメント

- ☐ 待ち時間: 児童生徒が活動に参加するまでに教師が待っている時間の割合
- ☐ 黒板の使用: 教師による黒板の使用
- ☐ グループ/ペアワークの編成: 生徒をペアやグループにどのように割り当てるか、決まりごとはあるか?
- ☐ 学習規律の維持: 他の生徒や自分自身の学習を妨げないように、教師がどのように児童生徒の学習意欲を維持しているか。
- ☐ 指示や理解度の確認: 児童生徒が最小限の時間で指示を理解できるようにするための方法。
- ☐ 机間指導: 児童生徒に必要な支援を与えるために、教師がどのように教室内を動くか。

2. 指導法

- ☐ 活動の選択と適切性: 児童生徒の興味と学力のレベルに適した活動を教師がどのように選択するか。
- ☐ TTT vs. STT: 教師の発話時間(TTT)と生徒の発話時間(STT)の比率。
- ☐ 教室内でのやり取り: やり取りのパターンは、教師から児童生徒(T>S)、児童生徒から生徒(S>S)、そして児童生徒から教師へ(S>T)という順番に進みます。

3. 教授スキル (表現スキル)

- ☐ 非言語スキル: 教師がコミュニケーションと学習方略を助けるために非言語的なコミュニケーションをどのように使用するか。
- ☐ 効果的な声の使用: 教師が、児童生徒の理解をたすけるために (場合によっては、授業マネジメントのために)、声のボリューム、トーン、ピッチ、抑揚などを使用しているか。

4. 動機づけ

- ☐ 信頼関係の構築: どのようにして教師と児童生徒が相互に尊重する環境を作るか
- ☐ 最適な課題の難度: 能力が様々なクラス内で、どのようにして、児童生徒にとって適切な難易度の課題を与えるか
- ☐ 誤りの修正: 生徒が誤りを発見し、それを修正する方法を教師がどのように教えるか
- ☐ 褒めること: どのように児童生徒の成功を認め、褒めてあげるか
- ☐ 生徒とのやり取り: どのように教師は、英語を使いながら、すべての生徒に可能な限り平等に注意を払うことができるか。

5. 授業計画と教材

- ☐ 視聴覚教材: 会話教材、音楽、ポスター、実物をどのように使用するか。
- ☐ ICTの使用: インターネット、ワードクラウドウェブサイト、ブレンデッドラーニング、反転授業などをどのように使用するか。
- ☐ 多感覚を用いた授業の計画: 視覚、聴覚、触覚 (感覚)、運動 (身体を動かす) 等を好む学習者にどのように対応するか。
- ☐ “SMART”を含む目標の設定: 具体的であること (specific)、測定可能であること (measurable)、達成可能であること (attainable)、関連性があること (relevant)、時間内に収まる (time-framed) 目標をどのようにして設定するか。
- ☐ 様々な活動の作成: どのようにして、教師が1つ以上のスキル (すなわち、話す、聞く、読む、書く) を使用しながら、様々なやり方で既習事項を使う活動を計画するか。

巻末資料 2

本研究の成果発表は、2021年3月29日(月)～4月2日(金)まで、動画公開という形態で開催した。本研究組織のメンバーである吉田、Miller氏、Sheen氏、岸本氏、伊藤氏の発表に加え、コメンテーターとして、関西大学・今井裕之教授に登壇いただいた。公開期間中のサイトへの訪問者は96名であった。以下は成果発表会の開催案内である。



令和2年度 兵庫教育大学「理論と実践の融合」に関する共同研究活動
**VEO®を活用したオンライン教員研修
 プログラム開発のための基礎研究
 オンライン成果発表会**

Video Enhanced Observation (VEO)は、授業改善や教員の力量形成を支援するデジタルシステムです。授業場面を録画し、そこに見られる教師の行動や発話、児童生徒の学習にタグ付け(tagging)することで、授業改善につながる教師の気づきや発見、あるいは、授業をめぐる同僚や教師教育者との対話を促進するのに役立ちます。

本研究では、小学校で外国語科の授業を担当する教員の協力を得て、VEOを活用したオンラインでの授業改善および教員研修に関する基礎研究を実施しました。その成果の一部を動画配信で公開いたします。皆様のご参加をお待ちしています。

■日時(公開期間)：2021年3月29日(月)午後1時～4月2日(金)午後5時
 ■開催方法：動画公開による成果報告(日本語字幕付き)
 ■申込み方法：下記のURLもしくはQRコードから申込みフォームにアクセスしていただき、必要事項をご記入ください。後日、アクセス先URL等を送付させていただきます。

■申込先URL: <https://forms.gle/wS8PTH33cah58JqCA>



プログラム

開会・本研究の概要 吉田達弘(兵庫教育大学・教授)
VEOによる教員研修支援 Paul Miller (CEO, VEO, Inc., U.K.)
個人コーチング-デジタル化によって促進される継続的な専門性の開発
 Christopher Sheen (Oxford University Press, Turkey)
VEOを活用した授業改善の事例
 岸本周子(丹波篠山市立西紀小学校・教諭)
 伊藤 寧(三木市立緑が丘東小学校・教諭)
 吉田達弘
本研究に対するコメント 今井裕之(関西大学・教授)
閉会 吉田達弘

※英語によるプレゼンテーションには、日本語字幕が付きます。

スピーカー

-  **Paul Miller (CEO, VEO Inc.)**
 英国VEO社のCEO、創設者。VEOの開発に携わり、学校教育以外のフィールドにもVEOを普及させている。現在、VEO3.0の開発が進行中。
-  **Christopher Sheen (Oxford University Press, Turkey)**
 オックスフォード大学出版局で教員研修、コーチングを担当。同社のVEOを活用したデジタルコーチングの開発に携わっており、アジア、アフリカ、中南米での指導経験を待つ。日本の大学でも教鞭を執ったことがある。
-  **岸本周子(丹波篠山市立西紀小学校 教諭)**
 学校では、英語担当として、また、市内の教員研修会等の運営にも携わっており、丹波篠山市の小学校英語を牽引する存在。
-  **伊藤 寧(三木市立緑が丘東小学校 教諭)**
 今年度6年生の担任を務める傍ら、校内の英語担当として、また、市内ではフォニックス指導の研修リーダーを務めるなど、活躍中。
-  **今井裕之(関西大学 教授)**
 本成果発表会のコメンテーター。社会文化理論に基づく英語授業研究、教師教育研究が主な研究分野。小中高の教科書編集にも従事している。
-  **吉田達弘(兵庫教育大学 教授)**
 本研究の代表者。専門は英語教育学。特に、社会文化理論に基礎を置きながら、教師の成長や教室でのコミュニケーションを研究している。

本件に関するお問い合わせは
 吉田達弘 (tyoshida@hyogo-u.ac.jp) までお願いします。